

月刊
オパールン王国
2011年
11月号



序文

いやはや、先月思いつきで発刊してしまった「月刊 オパーリン」であったが、「月刊 オパーリン王国」と名を変えて今月も無事に発刊する事が出来た。

まずは先月の創刊号について振り返ってみる。先月号は10部刷って、今手元には二部ほど残っている。まあ、上々の滑り出しだったのではないだろうか。

また、先月号は電子書籍サイト「パブー」にて電子化し、より多くの人を読めるようにした。11月22日現在、閲覧数169・ダウンロード数9となっている。紙版は一部で複数の人を読める事を考えれば、紙版と電子版で合わせて200人程度の人先月号を読んできたことになる、と勝手に試算してみる。

さて、本誌は今月から誌名を「月刊 オパーリン王国」と改めたが、ここからはその経緯について書き序文としたい。

さて、書いていこうか。実のところ僕は「オパーリン王国」という独裁国家の国王なのである。これは昨日今日思いついた事ではなく、かれこれ3年ほど前、大学2年生の頃にしっかりとどっち上げ、友人を勝手に国民にし、国王になったのである。

では何故「オパーリン王国」を創ったのか。北杜夫「マンボウ・マブセ共和国」、畑正憲「ムツゴロウ王国」、武者小路実篤「新しい村」など、僕の好きな作家は国やら村を創っている人が多く、「僕も将来小説家になるんなら国の一つくらい持っておかないとな」と思ったのがこのきっかけである。

上記の経緯で「オパーリン王国」は誕生したのであったが、国民達はまったくもってやる気が無く、この国を大きくしようという気概などこれっぽちも持ち合わせていなかった。そこで、国王たる僕は、小説を書いたり、飲み会でまくし立てたりなど、細々と「王国構想」を維持させていく事を余儀なくされたのである。

そしていよいよ、本誌についてである。本誌「月刊 オパーリン王国」は「王国構想」の一環として、今後の活動を行っていく。せっかく頭の中で色々な事を考えついても、それを言語化し、さらには発信しなければ、何も起りはしない。「王国構想」は若き青き日の僕の「何かを起こしたい」という思いの結実であり、本誌「月刊 オパーリン王国」もその基本理念に基づき、自分達の手で「何か、面白い事」を起こす事を目指して邁進していきたい。本誌はその「何か」を起こす為の開かれた自由な言論の場でありたいと思う。よって、雑誌コンセプトは「はばからない」とした。

今月号からは、友人の東町健太（ちなみに彼は国民ではない）が記事を投稿してくれた。今後も書いてくれるという事なので、彼の文章が読めるのを楽しみにしている。

ちと長くなったが、これにて序文をお終いにする。では、先月号と比してボリューム満点となった「月刊 オパーリン王国 十一月号」をお楽しみあれ。

オパーリンーカ月（日記より）

このコーナーでは僕がその月（まあ、アバウト。大体一カ月。）に書いた日記を載せていきたいと思います。なお、僕は毎日几帳面に日記をつけて一日を振り返るといような草食系男子ではないので、その月の日記が少ない場合はカレンダー、ツイッターでの発言等から推測し、「後日日記」を書く事にします。僕が一カ月、何をしていたのか、という極私的などーでもいい内容といえればそれまでですが、まあ、そういうコーナーです。

・ 2011年10月23日（日）

後に紀行文「日本海が見たい」に書く事になる旅の初挑戦に挑む。敢え無く撃沈し、瀕死の状態で帰ってくる。

・ 2011年10月26日（水）

本日、研究室ばっくれ。自宅でコーヒーをいれて新聞を読む。新聞読んでて思ったのだけど、記事が書いてある紙面の裏が一面広告になっていると切り抜く時に記事が被らない。そういう狙いがあるのかなあ？

・ 2011年10月31日（月）

この日は大腸内視鏡検査をした。前日は断食、当日の夜中から大量の下剤を服用し、腸の中を空っぽにした。大量の下痢便がシャーシャーと水の様に出了た。当然お腹は痛かった。

当日は、友人O（仮称）に車を出してもらい、病院までの送り迎えをしてもらった。その時に、Oから牛角の20%OFFチケットをもらい、後日別の友人Sと食い放題を食べた。ありがとうO。

検査はもう、最悪だった。痛いなのなんの。脂汗だらだら、ろくに呼吸も出来ず、悶絶した。そして僕がそんなに痛がっているにも関わらず、検査をしている医者は自分は痛くないからといって、やたらと僕にモニターを見るように指示してきて、非常にウザかった。

「ほおら、これが直腸結腸だよ。見て見て！滅多に見れないんだからさあ。このヒダヒダがね・・・」

痛くて見れんって言ってんじゃないか、糞が。ドS。

で、検査結果は白。何の病気もありませんでしたと。何のための血便だったんだろうか。結論としては、

「あの検査する位なら病気で死んだ方がいい」

という教訓を得ました。

・ 2011年11月12、13日（土、日）

「日本海が見たい。」の再挑戦を行う。詳しくは来月号掲載予定の「日本海が見たい。一再挑戦編一」に書くつもりなのでそちらを見てください。

・ 2011年11月18、19日（金、土）

「日本海が見たい。」事後処理の為、再度長野へ旅立つ。

僕は物心の付いた頃から現在に至るまでずっと、周囲の大人達から「お前、このままじゃ社会に出たらやってけないぞ」的な警告、恫喝を受け続けてきた。もう、23歳も半ばに差し掛かっているというのに「大人」だなんて、まるで反抗期の餓鬼の様（事実、餓鬼なんですけどね）で恥ずかしいのだが、実際、僕にそう警告をしてくださった方々は僕よりも何段も「大人の階段」を上っている輩ばかりであった。

彼らの僕に対する叱責の趣旨は「逆らうな、屁理屈こくな、怠けるな、和を乱すな」等々であったが、その時々「当時の僕」はそう叱責されればされる程「何言ってるんだこいつは」と余計に反発心が沸き、全く聞く耳を持たなかった。しかし、ほんの最近になって「ああ、奴らの言う通りだったな」と、反省からではなく諦めから、そう思う様になった。日々の雑事をこなさずに「何で？何で？」ばかり言っている奴は、社会にとっては何の用も成さない（というよりもむしろ、厄介、邪魔っけだから拒絶される）ということに気づいたのだ。いや、気づいたというよりも、「前から分かってはいたけれども、やっぱりそういう風にしか考えないのね」と失望したのである。

そう憤る僕ではあるが、実際のところ彼らの言わんとしていたことは、かなりの部分で事実であることもまた確かなのである。最近つくづくそう思う。僕は社会生活が苦手である。それは確かなことである。でも一体なぜ、僕はこんな風に「社会生活が苦手」になってしまったんだろうか？そこで思い当たるのが少年時代、小学校生活での経験である。

では、いよいよこの文章の主題である「社会生活の始まり」について書いていく。

小学校での生活は、日本人の子供にとっては初めての社会生活であり、「小学校」はまさに社会の縮図である。で、その小学校という「社会」の決まり事を決める場所、つまりは小学校の「民衆主義的な政治、議会」の要素を担っているのが「学級会」や「帰りの会」である。そして、この「学級会」や「帰りの会」において僕には数々の苦い経験がある。ここから、その数あるエピソードの中のいくつかを紹介しながら、学級会、帰りの会「批判」を行っていく。

先に「学級会、帰りの会は小学校における議会性民主主義を担うものである」と書いたが、「表面上はそうなっている」という話であって、実際それは人類が理想と掲げる「民主主義」とは遠くかけ離れた「おぞましき魔女裁判」以外の何ものでもなかった。

「帰りの会」とは一日の終わりに行われる10分程度の「会議」であり、その日の出来事をクラスみんなに報告し、共有するという趣旨のものである。「日直さん」と言われるその日一日の「雑事当番」の生徒が議長を務める。そして、具体的に帰りの会で報告されるのは「今日、楽しかったこと」と「今日困ったこと」の二つである。

ここで僕が問題にしたいのは「今日困ったこと」の方である。なぜなら「今日楽しかったこと」は形式上設置されているだけに過ぎず、実際に報告する生徒も殆どいないからである。一方の「今日困ったこと」はその日一日締めくくり、メインイベントにふさわしい熱気を帯び、クラス全員の注目を集める。では、この「今日困ったこと」では実際にどんな内容が報告されるかと

いうと

「〇〇くんが今日の掃除をさぼっていたのでやめてください。」

「〇〇くんが今日、3時間目の授業中にうるさくて、迷惑だったので注意したら「うるさい、だまれ、ブス！」と言ってきたので、謝ってください」

の様な、実名、個人攻撃を目的とした「断罪」がその殆どを占めているのである。

で、この個人攻撃の対象である「〇〇くん」は大抵の場合、僕かその他二、三人の「札付きの嫌われ者」だった。そして、その報告をするのは決まって「学級委員などを勤める、先生のお気に入り、あまり可愛くない、気の強い、自分こそは正義と疑ってやまない、フェミニストの卵女子」であった。

個人攻撃されることそのこと自体はまあ、良いとしよう。問題なのはその報告後の問題の処理のされ方である。

報告の後、議事進行役の日直は

「では〇〇君、どう思いますか？」

と台詞の棒読みをする。発言の機会を与えられた僕は、僕なりの主張、自己弁護、を行う。

するとすかさず、報告者である「被害者気取り」のその女子がヒステリーな金切り声で、何事かを叫ぶ、喚く、などして反論する。それに対して、ちっとも悪いなどとは思っていない僕はまた「自分が悪くない理由」を淡々と論理的に述べる。すると、ヒス女は再び何事か喚き、という行き違いのやりとりが何度か続き、最後には僕に還付なきままに論破されたヒス女が泣きだす。こういう女の泣き顔ほど醜いものはない。

ヒスが泣き出したことで、クラスは重い沈黙に包まれる。と、ここまで黙って話を聞いていた「先生」がゆっくりと立ち上がる。先生は優しく、穏やかな声でみんなに語りかける。

「ねえ、みんなはこの「事件」についてどう思う？考えてみて。」

「事件」の所だけアクセントが強い。先生は相変わらずニコニコしながら、しばしの「わざとらしい間」をとった後、

「みんな考えたかな。じゃあA君はどう思う？」

と「まじめ」で通っていて、先生お気に入りのA君を名指しで指名する。

A君は能面のようなのっぺりとした無表情で、

「ヒスちゃんを泣かせた〇〇君が悪いと思います。」

と棒読みする。「魔女裁判」の始まりである。

先生は小さく相槌を打った後、

「うん、そうだね。じゃあ、B子さんは？」

とこれまたお気に入りの指名し、「意見」を聞く。B子さんもA君と似たり寄ったりのことを言い、先生の期待に応える。その後も同様のやりとりが二、三人分繰り返される。

「クラスみんなの意見」を聞き終わった先生は

「みんな、ありがとう。」

と甘ったるい声で言い、僕を見る。その表情はいつの間にか鬼のような、そしてどこか勝ち誇ったものになっている。

「〇〇君、ヒスちゃんに謝りなさい！！」

と、金切り声で僕に要求する。

「先ほども言ったとおり、これこれこういう理由で僕は自分が悪いとは思っていませんので謝りません。」

と、僕は却下する。すると先生はますます怒り狂い、僕に「謝罪」を要求する。僕はまた理由を述べ、固辞する。この堂々巡りが数回繰り返された後、先生は千日手だと判定し、僕を廊下に引きずり出す。強制執行である。

「反省するまでそこで立っていなさい！」

僕ともみ合った為に息のあがった先生は、そうやって教室の扉をぴしゃりと閉める。そしてまた優しい先生に戻り、

「じゃあ、みなさん気をつけて帰りましょう。」

と言って、長かった「帰りの会」が終了する。

みんなが帰った後も「反省」をしない僕は廊下に立っている。先生は職員室に行ってしまう。数十分して、先生が

戻ってきて僕の前に立ち、

「反省しましたか？」

と聞く。僕は

「してません。」

と答える。先生は再び怒り狂い、僕に「反省文」を原稿用紙二枚分書く様に命じ、立ち去る。

このままではいつまで経っても家に帰れないので、仕方なく僕は「反省文」の執筆に取りかかる。が、反省していないので何も書けず、仕方なしに「いかに自分が反省していないか、悪くないか、それなのに反省文を書かなければならないこの世の理不尽、僕に反省を強いる教師の無能ぶり」について書き始める。書いているうちに夢中になり、気がつくと原稿用紙五枚分もの「大作」が完成していた。窓の外を見やれば、すっかり日も暮れている。

僕は「大作」を携えて職員室のドアを叩き、テストの採点をしていた先生に「反省文」を手渡す。愚鈍な先生は「やっと反省したか」とでも思っているのであろうか、優しい顔で原稿用紙を受けとり、読み始める。そして、みるみるうちに顔がひきつっていく。

読後、懲りない先生とひとしきり小競り合いを演じた後、先生は「これでは埒があかない」と判断したのか、机上の電話の受話器を手にする。しばらくして、僕の母親が職員室に入ってくる。母親は恐縮し、ペコペコと頭を下げ、僕を連れて家に帰る。

以上が僕の前風景である。小学校に始まり、現在に至るまで、ずっとこんなことの繰り返しであった。これは僕の個人的な体験ではあるが、多かれ少なかれ小学校での「民主主義」なんて、こんな程度のものであると思う。そこには「理」も「議論」も無く「みんな」と言う名の同調圧力があるのみである。そして、日本人はみんな、こんな「帰りの会、学級会的な民主主義」を小学校で体験し、それが「民主主義」だと理解して大人になる。だからこそ、日本の政治はあん

な有様だし、大学の授業、ゼミ、サークル、会社に入ったらそこでの会議でもきっと、おそらく日本中のどこに行っても、そこに「理」や「議論」はなく、「空気読めよ」の同調圧に支配された「顔のない人形」の様な奴らしかいないんだろうと思う。

そんな「社会」における「社会性」なんてものを、僕は持ち合わせていない。だからこそ最近、僕は「社会性が無い」と自認するに至ったのである。「コミュカ」糞食らえである。

しかし、ここで話が終わってしまっはつまらない。ただの愚痴になってしまう。やっぱり、何かを書くからには未来を見つめていたい。僕は世に出回っている「前向き教」は大嫌いだが、それとは一線を画しながらも、じゃあ、どうするのか？について書いていく。

と言っても、簡単な話である。「こんな社会は糞食らえ」であるならば、考えることはただ一つ、「僕が心地よく暮らせる社会（国）」を新しく作ってしまえばいいのである。これが、数年前から僕が提唱している「オパーリン王国構想」である。そして、この雑誌の名前も「月刊オパーリン王国」である。僕が行う表現活動は全てこの「王国構想」の具体活動なのである。全ては「僕の生き易い社会」の為に、そう「利己」の為に、である。居もしない「みんな」の為になく、あくまで「理」を好む「自分」の為に生きる、そんな人が少しでも増えてくれれば、僕も、まだ見ぬ僕と志を同じくする人達も、だいぶ暮らしやすい社会が実現するはずである。そう思いながら、僕は今日もこうして「誰も書いてくれと言っていない文章」を書いているのである。

「テレビばかり見ているとバカになる」なんてのは昔からわりと多くの人が言っている言葉であって、下手をするとテレビ番組にコメンテーターとして出演しつつそんな発言をする「知識人」なる方までおられる。子供のころからテレビばかり見て育った自分は今現在、自他ともに認めるバカとして障害者たちとともに単純作業に従事して糊口をしのいでいる現実から見ると、彼らの指摘もあながち間違いじゃないような気がしないこともない。

ただバカはバカなりに世の中の流れというか、いま社会で何が起きているのかなどの情報くらい知りたいという身分不相応な願望も持ち合わせているわけで、そういった願望を満たすためにまたテレビにかじりついてよりいっそう念の入ったバカに進化しつつあるのだけど、世の中を知るには別にテレビに限らなくても他のいろんなツールがある。

ひとつには現代社会を生きる必須アイテムであるインターネットが挙げられると思う。しかしそれにはひとつ欠点があって、それは手に入る情報量があまりにも膨大である、という点だ。そもそも情報処理能力があまりに欠如しているからバカなわけであって、バカがネットでどんな膨大な情報を得たとしてもバカにそんな大量の情報を処理できるわけなどないのだからそれは何も情報を得ていないのに等しい、というか生半可な知識や自分でもほとんど咀嚼しきれない知識を周りに自慢気に話してニヤニヤする、誤った情報をもとに不可思議かつ不気味な行動をとるなどして、人をイライラさせるバカも発生したりする。バカにネットは扱いきれない。

テレビもダメ、ネットもダメ、となるとどうすればいいのか？バカは世の中の流れから取り残され続けなければならないのか、というとそうでもない。先に述べたように世の中を知るためのツールなど腐るほどある。

一人のバカとして現代を生活している僕が愛用するのは「雑誌」だ。新聞でもいいんだけど、新聞を「たけえよ」という理由だけでとっていない底辺をさまよう我が家にとってそれは現実的じゃない。その点雑誌なら全て立ち読みで済ますことができるし、ゴミもでることはない。エコ、マジでエコ。

雑誌と一口にいってもやたら種類があるしどれを読むのかが問題なわけだけど、難しく考えることはない。適当に選べばいい。いろいろ読んでいくうちに自分が読んでいて「うわ、おもしろっ」と思えるものにめぐり合う。それをずっと読んでいけば自然と世の中の流れだの情報のだのが頭に叩きこまれるはず。

自分が最近愛読しているのは「女性自身」「週間女性」といったいわゆる女性誌とよばれるものだ。こんなもの読んでいるとそれこそ脳が腐るんじゃないか、と思わないこともなくはないけれどもおもしろいんだからしょうがない。これらを読むことによって芸能人のゴシップ、今人気の韓流スターの素晴らしさ、更年期障害の乗り越え方、ご利益がやばいパワースポットについてなどの貴重な情報を得ることができている。女性誌とはいっても作っているのは中年のハゲ散らかしたオヤジたちであり、「読んでんのなんかどうせ頭悪いおばさんだろ？ああん？」といった作り手の声が聞こえるような知性の欠片もないほぼ女性蔑視としか思えない誌面作りがなされている点も大好きだ。

そんな女性誌のなかで僕がとりわけ好きなのが皇室ネタの記事。歴史ある天皇家の記事にしているというのにあたかも親戚の家の人間関係を書いているかのような軽い筆致で書くあの感性。戦時中なら殺されてもおかしくないレベルの不敬さがたまらない。それも皇室が庶民に近くなったってことでそれがいいか悪いかはわからないけど、時代の流れなんですかね。秋篠宮様のところに男の子が生まれたからうやむやになったけど、皇室典範の改正でもめたときもまるでその辺の農家の跡取り問題のテンションで記事作ってるから「これ大丈夫か？」とドキドキしたのはいい思い出。ただそのころ愛子様小さかったからわからなかったけど、あの子どうみてもちょっとアレっていうか、健常者っぽくないっていうか、まあはっきり言うとどっからどう見ても池沼としか思えないわけで…。いじめ問題とかあったけど、そりゃあ小学生のガキのクラスに一人あんなの放り込まれたら当然いじめるだろう、と。ちなみに僕の知り合いは愛様を「あの子絶対アスペだよ」と断言していたけれど、あの子が天皇になる姿はちょっと見てみたかった。各国首脳を招いて「あう、あう、あうああっ！」とかいってパニックおこしてほしかった。この日本という国はもうすぐバカすぎて滅びる。そんな国の「象徴」としてはまさにぴったりだと思いませんか？

統計でもリスクの試算でもそうだけど、「実際にやってみなければわからないこと」や「まだ起こっていないこと」についての予測はあてにならない。今回の原発のコスト試算についても、原発推進派と反対派で事故リスクの試算が10倍位も違っていることに「結論ありき」でパラメーターを設定しているんだらうなあ、と感じる。

要するに、原子力発電のコストが火力発電よりも高くなるかどうかが当面の問題だろうから、それを見据えながら計算している様にしか思えん。事故に対する賠償にかかるコストを高く見積もるか、安く見積もるか、その匙加減一つで数値は大きく変わる。こういう風に、何かの目的の為に学問を不当に利用しようという姿勢は胸くそが悪い。

第一、そんなことばかりやっていると考えると、世の中に出回っているありとあらゆる「統計的数値」が信用できなくなってしまう。全ての数値を個人が検証する事は出来ないのだから、その数値の信憑性というのは、その統計をした者への「信頼」と同義なのである。そもそも、学問って、もっと純粹で志高きものじゃなきゃいけないと思う、「事情」なんかに左右されない「真理」を目指すものでなければ。

(2011年12月12日、電子化にあたって加筆、修正した。)

現在世間一般ではこの二項対立語は「世界経済は不安定性を増している。」、「やっぱり公務員は安定しているから・・・」という様に使われている。「安定」は良い言葉、「不安定」は悪い言葉としてとらえられている。しかし、本来この「安定性」という指標は「良し悪し」や「高低」を評価する言葉ではなくて、程度の「振れ幅」を言い表すための言葉であるはずだ。

もう少し詳しく考えると、「不安定」は良くなったり悪くなったり「幅」が大きいという意味だから、相対的な「良し悪し」を計る言葉ではない。で、「安定」はその「幅」が狭いと言う意味なので、良し悪しを判断する際には「良く安定」しているのか「悪く安定」しているのかと良し悪しの判断をする必要がある。

これらの前提を踏まえた上で、今現在日本国内で良く使われている「仕事に関する安定性」について、その使われ方について考える。

まず、一般的な「不安定な仕事」について、この言葉は「バイト、非正社員は不安定」収入の低い仕事によく使われている気がするが、収入の低い仕事というのは「低く安定している」仕事なのでこの用法は誤りである。本当に不安定な仕事というのは「収入が高くなったり低くなったりする」はずであるから、投資家やギャンブラー、完全成果主義の外資コンサルの営業マンなどに対して使うべきである。

そして、「安定した仕事」の代表格として現在人気が集まっている「公務員」について。公務員の給与について一概に「高い低い」を決めるのは、何をもって高いとするのかという基準の問題や、僕の知識不足もあって困難だ。しかし、サラリーマンの平均給与や平均生涯年収と比べたら高いのかもしれない。もし「高い」のだとしたら、その「高さ」が良いのであって「安定そのもの」が良いわけではないのだということを認識すべきだ。

なんでこんなに面倒くさいことを細かく言っているかということ、「言葉」は筋道立てて正確に使わないと、物事に対する「認識」にまで影響を及ぼすからだ。そして、ちゃんと物事を考えることの出来ない「馬鹿」が集団の中で増える（大多数を閉めるようになってしまう）と、民衆主義統治においてはその集団の意志決定が「馬鹿の意志による決定」になってしまい、真に合理的な意志決定の出来ない「衆愚政治」に陥ってしまう。

原発、防衛、少子高齢化、年金、増税、官僚批判、汚職、失言、煙草など、具体例を挙げていけばきりが無い（というよりもほぼ全てと言った方がいい）。「感情論」が「世論」になってしまっているように思えてならない。「一億総思考停止社会」はもう既に確立されてしまっている様に思う。

一度「思考停止」に陥ってしまった人間を立ち直らせるのは非常に困難だと思われるが、何とかしなければこの国の未来はない。気の遠くなる様な話だが、「教育」や「メディア」など、情報とその解釈に関する分野の再構築によって改善するより他に道はないと思う。

2011年10月23日、午前3時頃、僕はベットに入っただけでもなかなか寝付けないでいた。モヤモヤと浮かんで消える取り留めのない思念、「あー、明日はこれしよう。」「このままじゃダメだ、どうにかして浮かび上がらないと、でもどうやって？」などなど、一体何度同じことを考えたのか分からない様な類の雑念、悶々である。一度そんなことを考え出してしまったが最後、もうその晩は眠りにつくことはできない、といういつものパターンだった。

まあ、いつもの事であるとはいえ、悩んでいる当の本人は大まじめであり、いつも通りに解決策、つまりは自分が置かれているこの冴えない現状から脱却する方法、を模索しているわけである。この「現状からの脱却」という問題について考えるとき、その一番お気軽な方法というのは「旅」すなわち「ややこしいことは全部忘れて、今いる場所から逃げ出してしまうこと」である。この「現状打破」の方法として「努力」をするのか「旅」をしてしまうのか、それだけで人間を二種類に大別できそうなものである。

そして、「無責任型人間」の典型ともいえる僕は当然、何の迷いもなく「旅に出る」という解決策を「安易」に思いつく。ここで「日曜日だけれども朝早く起きて研究室に行き、実験をする」と思うことができれば、実際にはしなくてもいい、ほんの少しでも脳裏をかすめる程度の殊勝さが僕にあれば、僕の「現状」は今の様にはなっていなかったんだろうと思う。まあ、嘆いても仕方がねえ。

そしてこの「旅に出る」という逃避策、思いついただけで終わりにしておけば何の問題もないのである。しかし、「旅」という甘い響き、誘惑に弱い、欲望に素直な僕が耐えられるはずもなく、真夜中の三時に「出発」が決定してしまったのである。

「思い立ったら即決行」がモットーの僕は早速、ベットから這いだして寝間着から着替え始めよう。そして、着替えながら、ふと思う。「旅と言うからにはどこかに行かなければならぬいんだろうけど、はて、一体全体どこに行ったものか？」

しかし、この問題も心配するにあたわず、着替え終える頃には、ただ単に「遠いから」と言うただそれだけの理由で「日本海が見たい！」と思い立ち、僕のお気に入りの愛車、ホンダ・ソロ（原動機付自転車、ちなみに今回の旅の途中で彼に名前を付けていないことに思い当たり「武ちゃん」と命名）に跨った。

これが計3回、約1ヶ月にわたる壮大な旅の始まりである。今思えば、この時にもう少し真剣に「本当にいけるのか？」と自問していれば、これから話すような悲惨な目に遭うこともなかったのになあ、と思う。だがまあ、もう終わったことではあるし、その結果としてこうやって文章に書く事もできたのだし、悪いことばかりではなかったのかもしれない。なによりも、一生忘れないであろう思い出になった、それだけで十分ではないか。

以上、長々と前書きじみた事を書いてきたが、一端ここでしめよう。ここからは、旅の経過、その中で思ったことなどをだらだらと紀行文チックに書いていこうと思う。

思いつきで旅立ちを決心したものの、10月も半ばを過ぎており、生身を晒しバイクで疾走するには些か寒すぎる季節である。しかも外にでてみると小雨がパラついているではないか。あまりの寒さに身震いした僕は一度部屋に戻り、押入から股引（去年の冬から洗っていない。臭いを嗅ぐと少し据えた香りがしたが、気にしない！）を引っ張り出してズボンの下に履き、遠出用の厚手の手袋を靴に入れ、出来る限りの防寒対策を講じる。そしていざ、日本海。

が、実際に走り出してみると、ものの3分としないうち、に家を飛び出したことを深く後悔した。どんなに防寒しても、寒いものは寒い。全身がガタガタと震えるし、肺は痛くなるし、しばらくすると頭まで痛くなってきたし、完全に低体温症になっていた。そして、真夜中なので期待していたようなきれいな景色など全く見えない。畑の前を通れば「なんか臭い」ということからそれが分かるという程度のことである。

1時間も走ると、早くも旅の単調さに飽き始め、この理不尽な寒さに苛立ちすら覚える様になる。「なんで俺がこんな目に遭わなきゃならないんだ」と。しかし、考えてみれば至極当然の事である、真夜中、外の景色が見えるはずもないし、一日で一番冷え込む時間帯なので寒いのは当たり前である。「ただ単にお前が馬鹿なだけなんだよ」としか言いようがない。

ここで少しルートの説明をしておこうか。茨城県つくば市から、最短距離で日本海に行こうとすると、館林→高崎→安中（あんなか、面白い読み方だね）→軽井沢→上田→日本海というルートになる。高崎の手前くらいで空が明るくなってきて景色を楽しむことができた。で、結論から言うと初挑戦の今回は軽井沢の一手前、安中にある「おぎのや」という釜めし屋の前で諦め

て帰ってきた。やっぱり日帰りでは往復はきつかった。

以上が初挑戦の概要である。初回は大したことは起きなかったんだよね。約10時間、350キロを走覇したわけなんだけど、途中、100キロを越したあたりからケツが痛くて仕方がなかったねえ。まあ、この手の旅ではいつもの事なのだけれども。あと、肩こりも相当なものなのだよ。旅は痛みとの戦いだね、まさに。

(「日本海が見たい。一再挑戦編一」につづく)



(↑写真①) 初挑戦折り返し地点、妙義山付近の釜めし屋「おぎのや」にて。

読書リスト、感想文

このコーナーでは僕がその月に読んだ本や、見た映画、食べたラーメン、等の簡単な感想を書いていきます。

- 本 -

・加藤典洋

『日本の無思想』

読み終わってしばらく経ってからこれを書いているのだが、ほとんど内容覚えていないな(笑)。とにかく難しくてよく分からなかったことだけは覚えている。この手の文系の論文っぽい本って「理解されないために、難しいと思われるために難解に書いている」としか思えないものが大い気がする。まあ、僕の脳が弱いっていうのもあるでしょうけれどね、と謙遜しておこう。

おぼろげな記憶をたどって思い出せる範囲で概要を書くと、日本人は何で「ホンネ」と「タテマエ」とか言って嘘抜いても自己欺瞞の罪悪感に苛まれないでいられるのか?的な話だったように思う。で、この種の日本人独特の社会的な「あいまい」の許容、「空気読めよ」で異論を封殺する事への批判と言う点では後述の山本七平「空気の研究」に通じるところがあるような気がした。

・山本七平

『「空気」の研究』

難解。あと、古い本だったから文章中の具体例が古すぎて全然「あー、なるほど」ってならなかった。まあ、仕方がないんだけどね。もっと、ライトな感じで「空気読め?やだよ。」的な内容を期待していたんだが。

でもこの本、結構な名著らしくて、2ちゃんの「官僚が読むべき本百選」的なスレでも名前が挙がっていた。

・藤田博司

『アメリカのジャーナリズム』

途中断念。古すぎた。テレビと新聞がバトルしている様を書いていて、時代を感じた。余談ではあるが、今読んでいるアメリカの諜報機関「CIA」に関する本の翻訳者の一人がこの人だった。

直接この本の内容ではないけれど、こないだ朝日新聞の特集記事で「今、アメリカの新聞がヤバイ」的なのがやっていて、それは面白かった。この本を買うきっかけになったのもその記事のおかげなんだけどさ。アメリカでは地方紙がつぶれまくってて、見張る人なくなっちゃったせいでなのか、地方行政が腐敗してヤバいらしい。

・岩槻謙司

『なぜ、男は「女はバカ」と思ってしまうのか』

タイトルだけでジャケ買いしたのだが、実はこの岩槻教授の本は以前にも一冊読んだことがあった。研究室のパートの女の人に借りたんだけど。で、内容はほとんどその本と一緒に読んだ。この人は「量産型」の物書きなんだなきっと、赤○次郎的なさ。要するに、女性は幼少期に父親から「性的な目線」で見られるとそれがトラウマになって、男を選ぶ基準がくるってしまい、DVとかをする男を選んでしまう、という主張。読んで「まあ、そうかもね」と思う箇所はいくつかあったものの、「原稿用紙1枚で済む話を無理矢理引き延ばした感」が半端なかった。自分が文章を書くときには内容の重複は避けよう、と思った。反面教師としては得るところがあった。

・木谷恭介

『死にたい老人』

元風俗ライター of 老人作家が断食して死のうとする「体験記」。面白かった。こういう爺さんになりたいな。「他人に迷惑かけなきゃ生きられない様になるま生きてくない」「自分の人生は自分の意志で終わりたい」という姿勢は、自分が生きる上でも参考になった。筒井康隆「銀齡の果て」と一緒に読むと面白いと思う。

・佐々木俊尚

『キュレーションの時代』

すごい。今の時代に「予測可能な未来」についてここまで考えられるということに戦慄を覚える。今後の「情報社会」のあり方は、こうなるべきだし、ほぼ間違いなくこういう方向に進んでいこうと思われる。

内容をすっ飛ばして「感激」だけを先に伝えてしまったが、要するに「キュレーション」とは「(不特定多数の人間が)情報を有機的に繋げていく事」だと僕は解釈した。一つ一つの情報はそれ単品で持っているよりも、関連する他の情報とセットになることでより一層の価値を持つ。そして、情報の集合体は、何らかの方向性みたいなものを持つ。で、今までは一人一人が(プロでもない限り)勝手にその「情報の収集、価値付け」をやっていたんだけど、ネットでの「共有」によってそれらが結びついて、より深い、濃厚な「情報社会」ができていこう、みたいな話だった。

これは現代人必読の書だと思う。

・山田玲司

『資本主義卒業試験』

僕は前からこの人の作品(本業は漫画家)が好きで、この本も本屋で見かけて吟味なしで即購入。タイトル通り、この人は「資本主義嫌い」で、「環境テロリスト」と言っても差し支えないくらいの極端な「環境保護論者」、イルカ問題で有名な「シーシェパード」の前身「グリーンピース」が大好きだそう。僕は前述この人の主張に全面賛成なわけではないが、「世界にはこういう人が一人ぐらいいないとつまらないじゃないか」とも思う。

昨今、理想論を主張する人間に対して「中二病」とか「空気読め」とか言って揶揄する風潮があると感じるが、僕はその風潮に強い違和感を覚えるので、彼のような人にはこれからも頑張っ
てほしい。

本の内容自体は、前にこの人が書いた「非属の才能」とさして変わらず。どちらかという「非属の才能」の方が内容が濃かったので、この人に興味を持った人はそっちから読むことをお勧
めする。

- 映画 -

・『クロサワ映画』

深夜テレビでやっていて途中から見た。まあ、途中からでも容易に話の筋が追える内容だったので問題なし。気楽に、鼻くそほじりながら楽しく見れるような映画。面白かった。

自分を笑いのネタにして生きる女芸人が「マジに恋」をすることの難儀さ、というよくある使
い古されたテーマだった。が、使い古されてはいるものの、芸人に限らず普段「俺ってこんな変
な奴だからさ」と自らの醜態を晒すことを自分の持ち味にしている人間にとって、この「バカは
マジになっちゃいけないのか？」というテーマには考えさせられるところがある。

- ラーメン -

・「熟成蔵出し味噌 麺処 たちばな」

何とも場所の説明が難しい所にあるラーメン屋さん。住所は「茨城県つくば市上横場2431」
だそうだ。サイエンス大通りの角藤手前のファミマがある大きな交差点を左折（ガソスタ、マ
ックのある方）したところにある。

先日、大腸内視鏡検査をした時に病院に行く道の途中にあり、気になっていたので後日食
べに行った。

味噌ラーメンの店。信州味噌が店のお薦めだそうだ。麺が中太平打ち縮れ麺で、信州味噌とマ
ッチしていて美味しい。信州名物の「ほうとう」を意識しているのかな、なんて思ったりして。
叉焼も巻き叉焼を炭火で炙ってあって美味しかった。値段は高め。

今回（十一月号）から、この雑誌の発行人である僕（オパーリン）以外の執筆者が記事を投稿してくれることになったので、このコーナーを設けた。

・オパーリン

1988年生（23歳）。大学二年生の時、女にフられてばかりの学生生活に嫌気がさし、自分に都合のいいことしか起きない国を作りたいと思う様になり「王国構想」を計画し、勝手に「オパーリン王国」を創り独立。本誌『月刊 オパーリン王国』も「王国構想」の一環である。

また、アマチュア小説家としても活動しており、過去3度「筑波学生文芸賞」に作品を投稿するも全て落選。「世の中が俺に追い付いていない」と負け惜しむ日々を送っている。過去の作品は電子書籍サイト「パブー」で電子化されており、無料で読むことが出来る。

・東町健太

たぶん1987年生（24歳）。僕（以降、オパ）が4月生まれであるのに対して、彼は3月生まれなので学年は2つ上のはずである。が、詳しい事は分からない。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。

大学（文学部？）を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。

オパとはかれこれ3、4年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。

現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。

編集後記（紙版）

さて、これで「月刊 オパーリン王国 十一月号」は終わりであるが、いかがだったであろうか。今月号からは僕以外の執筆者が参加してくれて、雑誌という名の通りの「雑味」が少し出たのではないかと思う。今後も書いてくれる人が増えれば、益々「雑味」が出て面白くなるんじゃないかなあ、なんて期待している。今のところ、来月号に向けて、友人の一人にターゲットを絞って執筆依頼を行っているので、読者のみなさんは楽しみにしてください。

また、今月号は一ヶ月間記事を書きためる事ができたので、先月号よりも分量が増えた。そしてほぼ全ての記事を書きおろした事を考えれば「分量」だけではなく「質」についても良いものが出来たのではないかと自負している。

今月号を含めて、内容としては「エッセイ」がメインの構成になっているが、来月号以降は「対談」や「インタビュー」「小説」などのコーナーもやってみたいなあ、と一人で意気込んでいる。

では、また来月号で会いましょう。

（2011年11月22日）

編集後記（電子版）

読んで下さった皆さん、お疲れさまでした。今月の「月刊オパーリン王国」はいかがだったでしょうか。

12月号電子版発行にあたっては、エッセイ「原発コスト試算」を加筆修正しました。この事から分かったのは、電子版では紙版で発行した記事を見直し、（読者の反応を聞いたり、考えが変化した点については）より良くする事が出来るということだ。また、今月号ではしなかったが、読者の記事に対する反応、意見を記事そのものに加えて載せるのなんかも面白いかもしれない。つまり、電子版では読者との「関係」が反映できるという利点（付加価値）がある。なので、紙版でも電子版でも、記事を読んでくれて、何かを感じてくれた人（記事の内容は問題提起型に書いているつもりである）は、直接でも間接（メール、手紙、パブー、ツイッター）でも構わないので、感想を僕に伝えてほしい。

先月号に比して今月号は分量が増えたが、紙版を読んでくれた友人たちからは「長くなったが、それが苦痛とは感じなかった。」

「東町健太さんの文章（「バカが吠える！」）の文体が、エグイ、面白い。文章の展開が予想外だった。」

「オパーリンは（そのへらへらした言動とは裏腹に）沢山本を読んでいるんだね。見直した。」等の概ねポジティブな反応があった。

書いていて思うのは、この様な他者からの「反応」が大きな励み、モチブになるということである。「書いてて良かったー。」と思う。たまらなく嬉しい。もう少し贅沢を言わせていただければ、「批判」という反応も頂ければ、さらに嬉しい。Mなので。

12月12日現在、世間一般の学生たちが始まった「就活」に焦り励んでいる中、僕は就活もしつつ、それもネタにしながら「月オパ 12月号」の記事執筆に情熱を注いでいる。すでに何本かの記事は書きあがった。東町健太氏も12月号用の記事を送ってくれた。僕だけが読者に先行して記事を読んだ訳だが、期待通りにやってくれている。面白かった（ムフン）。12月号、楽しみにしててくださいね。

この「月オパ」というオナヌー、あまりに楽し気持良く、中々やめられそうにない。では、また来月号でお会いしましょう。さよなら。

（2012年12月12日）

「月刊 オパーリン王国」では「はばからない」をコンセプトに、「何か、何でもいいから、とにかく主張したいだ」という方に対して紙面を提供したいと考えています。少しでも思い当たる節のある方は是非、記事を投稿してください。送り先は、

Kuukiyomimasenn0409@gmail.com

まで。

本文、形式、筆名、簡単、筆者略歴を添えて送りください。お待ちしております。

（国王 オパーリン）

月刊 オパーリン王国 十一月号

<http://p.booklog.jp/book/40722>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40722>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40722>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.